
贖罪

うな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

贖罪

【Nコード】

N2682Y

【作者名】

うな

【あらすじ】

人を殺してはいけません。人の者を盗んではいけません。違法薬物を使ってはいけません。私はそんな当たり前のことを四年間かけて学んだ。妹をこの手で殺めたその日から、私の時間は止まったまま。

「ありがとうございます」

深々と一礼

お世話になったもの全てに向けて。

門の向こう、高くそびえる壁が昨日までの私と今日からの私の境界として立ちふさがる。

人を殺してはいけません。

人の者を盗んではいけません。

違法薬物を使っではいけません。

私はそんな当たり前のことを四年間かけて学んだ。骨の髄に染み込むまで何度も何度も復唱した。どんな時であろうと決して忘れぬように、何度も、何度も。

「二度とこんなところに戻ってくるんじゃないぞ」

見送り役の刑務官さんがやけに親しげな笑顔を向けてくる。私は短く「ええ」と答え、胸に秘めた言葉をそつと飲みこむ。

本当にいいのだろうか、と。本当に私のようなどうしようもない人殺しが清く正しく生きる人々の中へ混じっていいのかと問い掛けたくなる。だが、そんなことをしても意味がないことも分かっている。私は罪を償った。そう判断されたのだから。

「キミはまだまだ若い。しっかりと人生をやり直して幸せを掴みなさい」

だが彼女はもっと若かった。そう言いかけて、止めた。この刑務官さんに行ったところで気分を悪くさせてしまうだけだ。この罪は私だけが背負えばいい。そう自分に言い聞かせる。

「では、失礼します」

「奥さんによるしく」

「え？」

「おや？ まだ違ったかな？」

刑務官さんはこんな場所には似つかわしくないフランクな笑みをつくり、私の背中をバシバシ叩いた。

もしかすると棗さんのことだろうか　　コートのポケットに突っ込んだ手紙に意識を向ける。

「綾人くんへ

急な予定が入ってしまい当日お迎えには行けそうにありません。

鍵はいつもの場所に置いてありますので勝手に上がって下さい。夜には戻りますのでちゃんと部屋にいて下さいね。

蛭』

「お幸せに」

優しい言葉が滞っていた歩みを後押しする。

本当は違う。私と棗さんは刑務官さんが思っているような関係ではないけれど、それを訂正する必要もまたない。私が分をわきまえてさえいれば、それで全ては上手く行くのだから。

前へ一步。一旦歩き出せば自然と歩みは続く。最後の会釈を刑務官さんにして、私はもう一度人生を始めるために秋空の中を独り進む。

歳を重ねた身体に突き刺さる風の冷たさは昨日までの監獄の比ではないけれど、その冷たさすらも贖罪の一部だと思えば苦にもならない。

そう、私の贖罪はまだ終わっていない。守るべき妹をこの手で殺めた罪は四年程度の拘束で償えるはずがないのだから。

歩みを始めておよそ三十分、未だに天下の往来を私のような人間が行くことに抵抗を感じる。

脚の上げ方、腕の振り、姿勢、視線、エトセトラエトセトラ。壁

の向こうでは逐一出された指示が今はない。私は自由で、それはつまり罪の扱いらも私の一存に委ねられたということの意味している。

いつそのまま道路へ飛び出してしまおうか。ふとそんなことを考える。この四年間、自殺はするなとも教えられた。しかしそれはあくまで刑務所内で自殺をするなという意味合いでしかなかったのではないかと私は思う。

迷惑がかかるから。だから私は決してあそこでは死のうとはしなかった。罪を購えるかもしれないと淡い希望を持っていたことも一因ではあるが……それも最初の一年、二年のことだ。やはり根本的にあそこで出会った多くの人々に迷惑をかけたくないという気持ちがあつたのは確かだろう。

暖かかったから。決意が滲む程に。

刑務所での生活は世間一般に知られている程暗いものではない。少なくとも私の場合は、妹の命を奪ってしまった当時の生活環境と比較すると随分マシに感じられた。

そこには、自由はなかったが規律があつた。ルールを守っている以上は一定の生活が保障された。嘘も欺瞞も疑心暗鬼になる心配もそこにはなかった。私のようなタイプの人間にはきつと現代社会の謳う自由は重すぎるのだらう。つくづく痛感させられた。

「よろしく願いしまーす」

駅前。何かの新商品のお試し品を私より二、三年下の女性が配っている。薄っぺらな笑顔を張り付けて、作り過ぎて不気味な声を張り上げながら。

「新商品を無料でお配りしております。ぜひお試しくださいーい」

人の流れに乗って素通りしようとする私に半分に割った蜜柑がパッケージングされた袋が押しつけられる。

「よろしく願いしまーす」

笑顔。ああ、なんて気味の悪い笑顔だ。そんなことしなくても貰

ってやるから頼むからそんな貌で私を見ないでくれ。

「ありがとうございまーす」

ポケットティッシュサイズのお試し品を二袋ほど押しつけられた。商品名も確認せぬまま二つともコートに突っ込んで、少し早足になってその場を離れる。

「やっぱり苦手だな、ああいうのは」

開発が進み四年前とは全くの別物になってしまった都市部から離れる方向に足を進めながらひとりごちる。昔から作り笑顔などが苦手だった私の性質は刑務所生活を経て更に悪化しているようだ。無論あそこにも酷い笑い方をする輩はいたが、こちらほどではなかった。すれ違う皆が能面のような顔で笑う。嗤う。わらう。吐き気がする。

早く慣れねばと思う……だが、今はまだとても耐えられそうにない。

「少し、疲れたかな」

一時間と少しの時間をかけてかつての我が家へと辿り着く。我が家、と言っても借りアパートで、かつてと言うのは私が罪を犯す前のことだ。常識的に考えれば私の部屋には顔も知らない誰かが暮らしていて、私の居場所などあるわけもない。ここが『ハイツ棗』という名でない限りは。

棗 蛭 このアパートの所有者兼管理人であり、私の大学時代の先輩だ。唯一無二の肉親をこの手で殺め、身寄りのない私に対して何かと世話を焼いてくれたのも彼女である。刑務官さんが「奥さん」と言ったのもおそらく棗さんのことだろう。確かにあれだけ頻繁に面会に訪れ、手紙のやり取りをしていたのだからそういう関係だと思われていたとしても不思議ではないが……実際はそんなにいいものではない。身も蓋もない言い方をすれば傷のなめ合い……もつとも今の今まで私は彼女の傷を舐めてやることすらできていないのだ

けれど。

「しかし、ここは変わっていないな」

外観を眺める限り大きな変化はない。時代の流れに取り残されたような、一昔前の私にとっては安心感を覚える姿のままだ。もしかすると人入ってないんじゃないか？ と一瞬不安感を覚えたが入口から中に入っただけの郵便入れには全てネームプレートが入っていた。古いなら古いなりに需要があるということだろうか。

私は柵と書かれた最も古いであろうネームプレートの郵便入れから水色の封筒を取り出し、102号室の前に立つ。封筒の中身は鍵手紙で『いつもの場所』と書かれていたのは私の悪癖を知っている棗さんなりの茶目つ気だったのだろうか。鍵程度なら預けるなりなんなりできたはずなのに。

「……つと、考え事は入ってからにしよう」

封筒から鍵を取り出し、鍵穴に挿入。ゆっくり回すとかちり、と錠が開く音がする。

「ただいま」

もう返事をしてくれる人はいないと分かっているけれど、反射的に口にする。目に入るのは雑多な、けれどもの自体は少ない私と妹の暮らした部屋がほぼそのまま残っていた。おそらく……いや、確実に棗さんの仕事だろう。本当にあの人には頭が上がりそうになり。

「ただいま」

もう一度。馬鹿げた希望を夢想して。少しだけ語気を強めて口にする。と　　がちやりと。トイレとユニットバスへと続くドアが独りでに開き、

「うー？」

小さな女の子がひよっこり顔を覗かせた。

「あ、えつと……？」

「うー？」

「いや、うーじゃなく。キミはどうしてこんなところにいるのかな

「？」

「うー……」

何か、おかしい。確かに今さっき私は『妹が返事をしてくれるのではないか』というノスタルジックな幻想に囚われていたが、かといってそんなもの叶うはずがないし、そもそも妹はここまで小さくはなかった。いきなり現れた女の子はだいたい三、四歳といった感じだが、私の妹は四年前の時点で既に小学生だった。妹復活というご都合主義的奇跡が起こるにしても幼児化する意味が分からない。「こ、こついつときは警察か？ いやでも隣近所の子供が迷い込んだ可能性も……」

あるのか？ ドアの鍵はついさっき私が自らの手で開けたばかりだ。つまりあの時点では施錠されていた。この女の子が内側から鍵をかけた可能性もあるにはあるが、そんなことをすることに何のメリットがあるのだろうか。もう一つある出入り口である窓も同様だ。今現在は見たところ鍵がかかっているようだが……。

「あうー」

「キミももう少し話ができていい年齢だと思っただけだね」

「うー……」

バカにされたのは感覚的にわかるらしい。大きくなりくりとした目を少し細めて不満げに私を見つめる。

「ううー……」

さらに細める。

「うううー……」

さらにさらにさらに。もう殆ど目を瞑っているようなもので

その独特な仕草にピンときた。

「あー……もしかして棗さんの子供か？」

「なちゅめー」

女の子は初めて言葉らしい言葉を口にする。もつとも単なるオウム返しなのか、それとも肯定を意味しているのは定かではないが。

「えつとな……蛭。蛭さんだ。わかるか？」

「ほたるー？ ほたるはまーま」

まーま。まま。ママ。母親。どうやら当たりらしい。

「とうかあの人子供いたのか……完全に初耳だぞ」

少なくとも私が罪を犯す前はいなかったはずだ。絶対にそうとは言えないけど、ほぼ確実に。

定期的に面会にきてたはずなのに、いつの間に生んだんだろう。

尋常じゃなく着やせする人だから厚着してれば外見上は分からないかもしれないが……うーん。

「ふえ……くちっ！」

「ああ、悪い悪い。寒かったな。ごめんな」

うっかりドアを開けっ放しにしていたせいか女の子が身を震わせていた。すぐさま閉じて靴を脱ぎ奥へつれて行ってやる。私はコートを着ていたから平気だったが、女の子は『AGETHA』と名前の入った手作りらしいベージュ色のセーターにデニム生地のスカートという比較的軽装。秋とはいえ風の冷たさはそれなりに厚着をしている私にも身にしみたくらいだ、子供は風の子とは言っても流石に寒いだろう。鼻水垂らしてるし。

「ティツシュは……ないな。仕方ない。ほら、ちーんしな、ちーん」

「うー？」

「ちーんが通じない？ これがジェネレーションギャップか……」

ハンカチを差し出して「ちーん、ちーん」言っている成人男性を無垢な瞳で不思議そうに見つめる女兒の図。シユール過ぎる。

「ああ、もうこんなに垂れて……」

妙案も浮かばず、なるべく警戒させないように注意しながらハンカチをちっこい鼻に押しつける。女の子 アゲハ（仮）は物怖じすることなく、ちーんと鼻をかんだ。

「ん。よし」

綺麗になったのを確認。つつい癖でアゲハの頭を撫でてしまう。そして、すぐさま後悔。細くやわらかな黒髪に触れた手のひらが痙攣でも起こしたかのように震えだす。

「あうー？」

違う。この子は違う。触れ合った温もりと質感、それらは記憶に残るそれとは大きく異なるはずだ。だからこれはただの郷愁。悔恨と脆弱な心の見せた幻に過ぎないはずだ。

「うー」

アゲ八が心配そうに私を見上げている。似ている……のだろうか？ 正常な判断力を失った今の私には分からない。零れだした思い出の欠片は現実を捻じ曲げありもしない幻聴と幻視を私に与え、遠い昔の記憶が何度も何度もリフレインする。

「パパ」

ノイズだらけのセピア色。過ぎ去った時間の中で彼女は私をそう呼んだ。それは全くもって適合性を持たない幼さ故の勘違いだったけれど。けど、それでも。その言葉を糧に生きると誓った人間にとっては真実の所在などささいなものだ。ただ彼女を守って生きることを誓った私にとっては……。

「茜……」

「うー？」

ほら、やっぱり違う。アゲ八が首を傾げているじゃないか。

「なんでもないよ。ほら、座って。いいものあるから一緒に食べよう」

なんとか落ち着きを取り戻そうとして提案する。が、やはり言葉は通じないようで、アゲ八はぼけーっと私の顔を見つめている。

「失語症……とかではないよな」

アゲ八は平均的な三、四歳児に比べて随分と言語能力が低いように思われる。妹。茜が同年代だった頃と比較するとそれは顕著だ。

茜は心も身体も成長が遅い方だったが、それでもアゲ八ぐらいの年齢になる頃には一通りの挨拶はできたし、幼稚園に通わせるよう

になってからは時として煩わしさを感じる程に饒舌になった。それに対して目の前のアゲハは身体の発育こそ健全と思われるものの、話す力・聞く力がほとんど感じられない。この差異が個人差で済ませられるレベルなのかどうかは門外漢である私には分からないが、言語という異物を殆ど受け入れていないアゲハはそれだけで何かとても尊いもののように思えた。

「ほら、おいで」

畳の上に胡坐をかき、立ったままのアゲハに手招きする。

「うー」

どうにか伝わったのだろうか、こくりと頷いたアゲハはちょこんと行儀よく私の前に正座する。

私はコートのポケットを探り、手に触れた袋を取り出す。ここへ来る途中無料配布していた半切りみかんパッケージの新商品だ。ええと、商品名は……

『激烈！ みかん爆弾』

「……檸檬じゃないのか」

いや、そういう問題でもないのだけど。

こんなクレイジーなネーミングの食べ物を棗さんの娘に食べさせていいんだろうか。一応アゲハの様子も確認して判断、

「うー！ うーっ！」

なんかすごく興奮していた。みかん、好きなのだろうか。

「待ったまった。まずは毒見を……」

「ううう……」

「そんな恨めしそうな顔で見ないでくれ、頼むから」

じわわと涙をにじませるアゲハ。とてつもない罪悪感を感じながらみかん爆弾の袋を開封。中身は小さな飴玉程度の大きさのオレンジ色球体だった。一つ摘まんで指でみるとぷにぷにと弾力がある。どうやらグミ的なものようだ。

「これなら大丈夫か」

成分表も分からないなりに確認。注意書きらしいものも特にはない。おそらく普通のお菓子だろう。

「ううううー!!」

「はいはい、分かったわかった」

一つ自分の口に放り込んで異常がないか確かめてからアゲハの口にもみかん爆弾を一つ投げ入れてやる。

「おいしいか？」

「うーっ！」

「そうかそうか。それはよかった」

「うー、うーっ」

「ほら、今度は二つだ」

「うー」

身振り手振りだけでも意外と意思の疎通はとれてしまうらしい。

幸せそうにみかん爆弾を食べるアゲハを見つめながら、私は着たままだったコートを脱いだ。何故だろうか、冬の寒さを忘れさせるほどにこの部屋は暖かった。

「寝ちゃったか」

邂逅から数時間、窓から差し込む光が赤く染まり始めた頃、アゲハは私がお手洗いにいって戻ってくるまでの短い間に眠ってしまった。丸くなって動かないアゲハに最初こそは焦って取り乱してしまっただけだったが、この歳の子供は大抵こんなものだと思いだし冷静になって布団を敷いてやることにした。

布団は四年前と同じように押入れの中にあっただ。敷布団と掛け布団がそれぞれ二つ。私は一瞬の躊躇いの後、小さな方を選んだ。

「よっ……と」

布団を敷き、起こさないようにそっとアゲハを持ち上げる。

「軽いな」

あまりの軽さに重しでもつけて繋ぎ止めていないと飛んで行ってしまうのではないか、そんなバカげた感想を抱く。

この子は本当は軽くない。茜がそうだったように、軽い人間なんてどこにもいない。皆一様に地べたを踏みしめるだけの重さを持っているのに、私のような心の弱い人間はそんな当たり前のことを忘れそうになる。

四年前。茜の重さの意味を取り違えてしまったように……。

「んにゅ……う……」

そつとアゲハを敷布団の上に横たえ、今となつては名前すら定かでない昔流行ったキャラクターの布団をかぶせてやる。自らの行ったその動作があまりにも自然で……私は、溢れそうになる涙をどうにか堪えようと天を仰いだ。

天上のシミ。何一つ変わっていない。眠れない夜に人の顔のようだと茜をからかって遊んだあの日のまま。何も、何一つ変わっていない。

大切だった。何よりも大切だった。茜のためならばこの身を刻むことすら私は厭わない。過去、現在、未来。その全てで茜に勝る価値を私は絶対に見つけることが出来ない。本当に、本当に……大切だった、

だが私はその日茜を手にかけた。白いベッドの上で眠る茜。指先一本、最小の労力を以て守るべき唯一無二の肉親の命を奪った。

私は病んでいたのだと誰かが言った。

私に責任はないのだと誰かが言った。

私は間違えていないと誰かが言った。

だが、私は決して病んでなどいなかった。全ての責任は徹頭徹尾私にあり、私の間違えは何をどう言い繕おうと消すことなどできなかった。

私は私の意思で、間違いと知りながら妹の命を止めた。その身体

の軽さに耐えきれなくなつて、彼女の未来を断つてしまったのだ。許されるはずがない。例え社会が私を許そうと私が私を許さない。私は裁かれなければならぬのだ。もつと苛烈に、死ぬことすら生温いと思えるような地獄の責め苦の限りを尽くして裁かれねばならない。その裁きが済むまでは私は決して死ねない。そうでなければ茜に会わず顔がない……！

「相変わらずね、綾人くんは」

不意に一陣の風に乗って涼やかな声が届いた。

玄関。開かれたドアの向こう側、腰まで届く黒髪を風になびかせて一人の女性が立っている。

「棗、さん……」

詰まつた声が情けなく漏れる。棗さんはドアを閉め、靴を脱いでどこかかと不機嫌そうに歩いてきて、にっこり。

「ほ・た・る。はい、復唱」

有無を言わせぬ語調。借りなどなくとも私はこの人には頭が上がらない。

「蛭さん、お帰りなさい。お仕事お疲れさまでした」

情けない涙は拭つて、精一杯の笑顔で労いの言葉を贈る。蛭さんはいじい、と私の顔を睨みつけ、不機嫌そうに呟く。

「自己嫌悪オタク。周りがごんだけ心配してるかも知らないでこのバカ」

……手厳しい。だが的を射ているし、言葉の根本には私に対する厚意がある。反論など出来るわけもない。

「すみません。可能な限り人には見せないようにしているんですけど」

「はあ……本当に救いようのないバカね、綾人くんは。嫌でも私に頼らざるを得ないように手足もいじやおつかしら」

「目がマジですよ、なつ、蛭さん」

「大丈夫。半分は冗談だから」

「半分は本気ですかっ!?!」

「うー……?」

「あ、やば」

声を張り上げ過ぎたせいだろう、布団の中ですやすや眠っていたアゲ八が目をこすりながら身体を起こす。

「ごめんな。まだ寝ててだいじょうぶだから、ほら、おやすみ」

頭を撫でてやりながら、ゆっくりと寝かしつける。アゲ八は十秒としないうちに寝息を立て始めた。

「さすがね。私だとぐずって聞かないのに」

「昔取った杵柄ってやつですよ」

「それもあるだろうけど……やっぱり本能的に分かってるのかしら。この子人見知りとか凄くて」

「人見知り……? むしろ簡単に懐いてくれましたよ」

「そりゃまあ、綾人くんは父親だしね」

「ああ、なるほど。私が父親だったんですか。どーりで………つて、はあ!?!」

私が父親? この子、アゲ八の? いや、なにがどうしたらそんな理屈が成り立つというのだ。そもそもこの子は蛍さんの娘であつて……。

「アゲ八起きちゃうからもう少しトーン下げて」

「い、いや、でも……」

「ちゃんと順を追って説明するから落ち着きなさい。別に無理やり認知迫ったりしないわよ」

取り乱す私を落ちつけるように冷静に話を進める蛍さん。私は、大きく深呼吸をしてどうにか心を落ち着けようと努める。

「この話は私もあまりしたくないんだけど……まあ、仕方ないわね。あの子、アゲ八が生れたのは綾人くんが裁判を終えて判決が下った少し後だった。つまり、私がアゲ八を授かったのは私の両親が交通事故で死んで、そこに同乗していた茜ちゃんが植物状態になることから始まり、綾人くんが罪を犯すまでの最悪の一年間の間ってこと

になるの。ここまでではいい？」

「ああ、大丈夫」

話す蛍さんは気丈に振る舞っているけれど、それでもとても辛そうに見える。当たり前前だ。あの一年間は本当に文字通り『最悪』だったのだから。

「それじゃ……あんまり細かい部分は話すだけ無駄だから端折るけど、あの頃の私たちは本当に荒れてて、爛れててどうしようもなかったわよね？ お互いを罵り合ったり、かと思えば所構わずベタベタしてみたり。当然そういうこともあったし、もしかしたらなんて考えずにただ溺れてたから、それはある意味必然だったと思うの。むしろ、できない方が不思議だわ」

苦虫を噛み潰すように蛍さんは言う。俺は、よく知ったはずの『最悪』の中身にいちいち新鮮味を覚えていることに驚き、すぐ隣で寝息を立てているアゲ八を、今日の今日まで知らなかった自分の娘を見た。

「それは、そうだけど……でもそれならなんで俺は？」

どうしてアゲ八が自分の娘かもしれないという推測に至らなかったのか。蛍さんの娘と分かった時点でどうして自分が父親である可能性を考えなかったのか。この状況はあまりに不自然すぎるじゃないか。

「理由は色々あると思うけど一番はやっぱり……」

蛍さんは一旦言葉を止め、俺の頭を両手で掴んだ。そして、真っ直ぐな瞳を向けてくる。

「呪い、かな」

「呪いって……そんなの、」

「あり得ないって思う？ じゃあ言い方を変えましょう。綾人くん、貴方は病んでるのよ。心を侵されているの。この世の何よりも大切だった茜ちゃんの命を奪ってしまった綾人くんを責める貴方自身の心に犯されているの。身も蓋もない言い方をすれば精神病よ。貴方が何の罪もない子供を殺しておいて四年にも満たない歳月で外へ出

てこれたのもそのおかげ」

捲し立てるように蛍さんは言った。俺は、その言葉に妙に納得してしまつて、蛍さんの言葉を聞く前に答えに至つた。

「そうか俺が、茜の『パパ』だつたから……」

「そうよ。茜ちゃんの命を奪つてしまつた貴方は茜ちゃんに自分の全てを捧げるという儀式を行つて自己の崩壊を避けた。つまり、茜ちゃんの『パパ』であつた綾人くんは茜ちゃん以外の誰か……今回言えばアゲハの父親であることを認めるわけには絶対にいかなかった。茜ちゃん以外の『娘』を認めるわけにはいかなかった。だから多少おかしくても見えないふりをするしかなかった。それが私の考えよ」

強引なこじつけだけどね、と蛍さんは自嘲するように笑う。確かに話だけを聞いていれば何を世迷言をと取れなくもない。だが、それは実際に目の前にある現実として俺の中で動いている。信じる信じないではない、そんなもの関係なく俺は認めるしかないのだ。

「それじゃ、蛍さんがアゲハを生んだ時のことも？ 俺、蛍さんが定期的に面会に来てくれていつの間にも子供なんか産んだらうつて思つてただけど……」

「自分で言うのもなんだけど、私全然妊婦には見えなかつたのよね。だから面会の際には気づかなかつたらうし、出産して会いに行けない時も手紙でそれらしいアリバイ作りしてたしね」

思い返してみると……確かにそうだつたかもしれない。刑務所の生活は外と比べると随分規則的で、極端にルーチン化されている。だからこそ俺は蛍さんがいつ面会に来たのか覚えていると思つていたけれど、むしろ定期的な面会もルーチンの中に含まれ、埋没してしまつていたのだろうか。だとしたら……本当に俺は恩知らずな男だ。

「蛍さん、俺は……っ」

「お帰りなさい、綾人くん。今日からまたよろしくね？」

何かを言おうとして、その前に蛍さんに抱きしめられて口を塞が

「こんにちは。今日も元気ね」

「うん、あたしげんきだよー」

「そっかそっか。それはいいことね」

「うんうん。いいこといいことー」

玄関では女二人が何やら楽しそうに話をしているようだ。俺も混じりたいがまだ料理の最中なのでキッチンを離れることができない。

「すいません、今手が離せないんで勝手に上がって下さい」

「りょーかい。んじゃご飯できるまで遊んでよっか？」

「うんっ、あそぶー！」

女二人が俺の後ろを抜けて部屋の奥へ入っていく。見てはいないがおそらく二人とも笑顔だろう。

「ふくんぶん」

俺は鼻歌を歌いながら料理の仕上げに取り掛かる。こんな毎日が続けばいいなと願いながら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2682y/>

贖罪

2011年11月6日03時10分発行